

## “レクリエーション指導”からみた高齢者福祉サービスの考察

千葉和夫（日本社会事業大学）

### レクリエーション指導、高齢者福祉サービス

#### 1. はじめに－研究の動機と目的

報告者は、本学会第20回大会において「レクリエーション指導概念の変遷と展望」と題した研究報告を行い、その結果、今日的な“レクリエーション指導”の概念が、理論的には「人々のレクリエーション自立への総合的支援活動」として確立されつつあることを明らかにすることができた。しかし、“レクリエーション指導”と呼ばれる行為の現実には、集会や集団での軽スポーツ、ゲーム、歌唱、ダンスなどに、その力点がおかれており、レクリエーションカウンセリングや施設・設備・組織をはじめとするレクリエーションのための社会システムの整備などはやや立後れの感を拭うことができないといつてよからう。

また、本学会第21回大会においては、20回大会における研究を引き継ぐ形で「社会福祉分野における“レクリエーション指導”概念の変遷と展望」－高齢者福祉分野を中心として－と題した研究報告を行った。その内容から、1987（昭和62）年5月に成立した「社会福祉士及び介護福祉士法」によって介護福祉士養成科目の中に“レクリエーション指導法”が必修科目として位置づけられたこと、さらに1989（平成元）年12月に国より示された「高齢者保健福祉十か年戦略」や1990（平成2）年6月に改正された老人福祉法には、生きがい対策、寝たきり老人ゼロ作戦、老人デイサービス事業、健康保持事業などレクリエーション指導との深い関連性が推測される事業が次々と打ち出されてきていることが明らかにされたのである。

しかし、例えば1992（平成4）年度には計3480か所になる老人デイサービスセンターでのレクリエーション指導に目を転じてみると、食事、入浴、移動などのいわゆる介護サービス以外の時間は、リハビリテーション、機能訓練、作業療法、音楽療法、社会生活技術訓練、回想療法、レクリエーション、集団ゲーム、生きがい活動など実に多種多様な表記のもとに、極論すれば“風船バレーボール”が行われているのである。このこと事態は、決して批難されるものではないが、原理論的背景や実践理論に欠落しては、高齢者福祉が目指しているQOL（Quality of Life）への接近はたいへん困難なように思われる。

以上述べてきたような問題の認識を研究の動機として、高齢者への医療・保健・福祉・学習サービスの4分野から、そのターゲット、レクリエーション指導の裏付けとなる実践理論などを構造的に明らかにし、高齢者福祉サービスのアイデンティティと他のサービスとの連携性などについて考察してみたいと考えたのである。

#### 2. 研究の方法

高齢者のQOLを目指して重層的に展開される医療・保健・福祉・学習サービスとそのターゲットを簡潔に描き出すことから、研究目的に接近しようとする。また、描き出されたターゲットに対して“レクリエーション指導”がいかなる理論に依拠しながら接近しようとするのかを、代表的先行研究を紹介する形で追論する。それは、大脳生理学、保健学、集団心理学、生きがい論などから得られた知見である。

3. 結果と考察 : 高齢者に対する諸サービスとレクリエーション指導との理論的関連性

	主たる場	利用者呼称	ターゲット	レク指導を支える関連理論
医療サービス	老人病院	患者、病者	疾病や障害などの局所的部位の治療	前痴呆や軽症痴呆患者の脳細胞非働性萎縮に伴う症状悪化防止治療の為の“右脳刺激訓練” <sup>1)</sup>
保健サービス	保健センター 老人保健施設	保健者	上記の疾患部位と同居しながらの心身の健康保持	適切な運動が心身の良好なコンディションを開発するという健康を支える運動理論。 <sup>2)</sup>
福祉サービス	特別養護老人ホーム 老人デイサービスセンター	生活者	日常生活行為の可能な限りの自立援助、社会的生活（社会的役割、余暇）の開発と安定の為の援助	集団で行われる各種の活動が、人間的交流の媒介となり、社会的性格や行動を開発するという社会生活技術訓練の理論 <sup>3)</sup> や権利としてのレクリエーション論。
学習サービス	老人福祉センター 公民館	学習者	知的文化的好奇心の満足や生きがいの開発と援助	知的満足や生きがいを感じている生活が、人間の生体内機構を活性化するという生きがい療法理論 <sup>4)</sup> 。

注1) 金子満夫発言“老年痴呆の進行とリハビリ”月刊「地域保健」88-9・10

1988年10月 P8~41

2) 池上晴夫『運動処方』朝倉書店 1982年3月 P57~60

3) 千葉和夫『楽しく遊べるリハビリ・ゲーム』中央法規出版 1984年10月 P212~233

4) 伊丹仁朗『生きがい療法でガンの克つ』講談社 1983年9月 P89

4. 結論

“レクリエーション指導”は、現実的に高齢者医療・保健・福祉・学習サービスの場で盛んに行われてきている。そこでは、既述したような理論的背景が混在しながら展開されていると云ってよからう。特に本研究のテーマである“高齢者福祉”は、医療・保健的レクリエーション指導と知的文化的満足や生きがい感を創造するレクリエーション指導との間にあつてたいへん重要な位置にあると言える。すなわち、セラピューティック・レクリエーションのプロセスでいうところの第2段階余暇教育・第3段階自主的参加援助の役割を發揮する位置にあるということである。このプロセスにおける援助が功を奏して、高齢者が知的文化的満足感や生きがい感を得られるとすれば、“高齢者福祉”の新たな視点となって浮上してくる。現在の高齢者福祉は、どちらかという所要援護高齢者中心で、いわゆる“介護”が注目されているが、今後生きがいなどが大いに論議されなければならない。